

墨痕 鮮やかな『達磨大師』が 銀賞に輝く

名立たるフランスの国際公募展
で13回連続入選、初の銀賞



栗谷正光(大雲道人)さん

「賞をいただけたこともうれしいですが、それ以上に、ここまで描き続けてこられたことがうれしいですね」

そう話すのは、禅画家として活動する栗谷正光さん。美浜町・徳賞寺の住職を務めるとともに「大雲道人(だいいうんどうじん)」という画号を持ち、禅宗の祖『達磨大師』を描き続けておられます。

栗谷さんにとって大きな転機となったのは2008年。大病を患い、個展などで海外へ赴くことがままならなくなったことから、新たな活動の場として、フランスで350年以上の歴史を持つ国際公募展「ル・サロン」への出品を決意。2013年に初出品し、銅賞に輝きます。以降13回連続入選を果たしており、このたび初の銀賞という快挙を成し遂げられました。

「病気で車いす生活になりましたが、手は動くので絵だけは残してもらえた」と思い、懸命に描き続けてきました。失ったものもありましたが、その分、絵と向き合う時間を得られた。その積み重ねが受賞につながったのかもしれない」と活動の軌跡を振り返ります。

恩師の言葉を胸に描き続け、 墨で描く禅画の世界を拓く

画業の原点は、15歳の頃。高校の文化祭で描いた水墨画を褒められたのを機に本格的に絵を描き始められました。卒業後、絵の道に進むことも考えられ

【写真上】寺の一角に設けたギャラリー。【写真左】ル・サロンの銅賞(2013年)と銀賞(2026年)のメダル。



銀賞に輝く

ましたが、恩師から「絵描きにはなるな。自分の世界で絵を続けろ」と助言を受け、美大への進学を断念。駒澤大学で住職への修行を積む傍ら、独学で絵筆を執り続けました。大学4年生のとき、「墨に学ぶ禅の心」というテーマで『達磨大師』を描いた作品を卒業制作として発表。それが、現在に続く独自の画風の出発点となりました。

そんな栗谷さんの心に残っているのが、「自然をよく見なさい」と語った恩師の言葉。「そのときは、風景をじっくり観察することだと思っていました。でも、命の営みや季節の移ろいを自分の中で受け止めて表現しなさい、ということだったのではないかと。60年を経た今、ようやくわかってきました」と語ります。

肩の力を抜いたとき、 描きたいものが描ける

絵を描くのは、寺の2階に設けたアトリエ。筆を持つと、一気に描き上げるとのこと。絵には精神状態が反映されると言われ、心と呼吸が整ったとき、納得のいく作品が生まれると言われます。銀賞受賞作もそのような心持ちで描き上げた一枚。

「入選への欲を捨て、肩の力を抜いて描いた。それが良かったのかも知れ

ません」との話。

受賞作のタイトルは「無我」。自然体で描かれた達磨大師は眼光鋭く、見る人の心の内をのぞき込んでくるかのようです。

寺の一角に設けたギャラリーでは、銀賞受賞作をはじめとする貴重な作品の数々を展示しており、訪れた人に無料公開しています(要事前予約)。

大病後、温かく迎えてくれた地域の方々への恩返しの一環として絵の収益を社会福祉協議会に寄付したり、公共施設への作品の寄贈を行ったりとチャリティー活動にも取り組み、人とのつながりを大切にされています。

「今後、体力に応じて活動の規模は縮小していきますが、できる限り描き続けたい」と話す栗谷さん。60年にわたる絵への思いは、変わることはありません。

●この記事に関するお問い合わせ
栗谷正光(大雲道人)さん

090-1163115278

